

〈論文〉

言語音を表す「音韻」

阿久津 智

要 旨

日本語と中国語における「音韻」という語のもつ複数の意味・用法のうち、言語音を表す用法について、各種（古今の）文献資料を用いて、調査・分析した。その結果、(a) 中国語の「音韻」が、主に漢字音（中国語音）に限られるのに対して、日本語の「音韻」は、広く諸言語の音に使われる、(b) 中国語の「音韻」が、学問や体系を表すことが多いのに対して、日本語の「音韻」は、言語音全体を表すほかに、単位音として使われることが比較的多い、ということが確認できた。

キーワード：音韻, 漢字音, 単位音, 音韻学, 『鏡花縁』

1. はじめに

本稿では、日本語と中国語における、「音韻」という語のもつ、いくつかの意味・用法のうち、言語音を表す用法について、見ていきたい。それは、この用法に関して、日本語と中国語とに、分離（あるいは、ニュアンスの違い）が見られ、そこにこの語の日本語としての特徴がうかがえるように思うからである。

筆者は、先に、「音韻」の語誌に関して、いくつかの論考（阿久津 2017, 阿久津 2018a・b など）を発表している。それをまとめると、次のようになる（[] 内は、本稿で補った）。

「音韻」という語は、平安時代の初期に、中国から日本に、その主な3つの意味（①調和した音、②詩のリズムや韻律、③漢字音）とともに伝わり（これらは、現代中国語の「音韻」の主要な意味でもある）、このうちの③《漢字音》が、日本において、中国経由で伝来した（中国では、早くに廃れた）梵語音（悉曇）とともに、研究対象としての「音韻」となり、やがて、それが日本語（および他の言語）にも及んだ。〔ちなみに、日本における「音韻」の初出例については、『日本国語大辞典 第二版』では、『経国集』（827 頃）に収める巨勢識人の漢詩からとり、釘貫（2007: 22）では、空海著『文鏡秘府論』（820 頃）における、『宋書』謝靈運伝からの引用を挙げているが、藤原浜成著『歌経標式』（772）に見える、「尽雅妙之音韻」、「未知音韻」、「同音韻」（沖森ほか 2008: 161-162）が古いようである（そうなると、「音韻」という語の伝来は、奈良時代以前ということになる）。同書は、漢詩に範をとり、和歌の規則（歌式）について論じており、これらの「音韻」は、『詩のリズムや韻律』に近いと思われる。〕

また、日本では、20 世紀にヨーロッパから伝わった phonology に「音韻論」を（当初は「音韻学」も）、phoneme に「音韻」（あるいは「音素」）を当てたが、中国では、phonology に「音位学」、あるいは「音系学」を（ただし、台湾では、主に「音韻学」）、phoneme に「音位」を当てている〔中国語の「音素」は、phone（日本語の「単音」）に当たるが、場合によっては、phoneme に使われることもある。「音素」という用語は、中国では、1913 年頃から、「読音統一会」の議論の中で、声母・韻母を指すのに使われ始め、日本では、1928 年頃から、日本式ローマ字論者によって、phoneme の訳語として使われ始めたようである（阿久津 2016: 38, 36）〕。〔「音素」の初出は、筆者の調べた限りでは、兵庫県姫路師範学校編『普通教育 国語綱要』（1910 年刊）にある「各行に発声〔子音〕と称する特殊の音素あり。」である（この「音素」は、phoneme の訳語ではないと思われる）。〕

こういったことから、言語音を表す（あるいは、言語音研究の用語としての）「音韻」には、日中両言語において、次のような（ニュアンスの）違いが見られるように思われる。

(a) 中国語の「音韻」が、主に漢字音（中国語音）に限られるのに対して、日本語の「音韻」は、広く諸言語の音に使われる。

(b) 中国語の「音韻」が、学問や体系を表すことが多いのに対して、日本語の「音韻」は、単位音として使われることが比較的多い。

筆者は、これらの点について、すでに部分的には触れたことがあるが（たとえば、日本語の「音韻」の《単位音》を表す用法については、阿久津 2019 で触れている）、本稿では、広く、この2点について、主に文献資料によって、語誌的に確認していきたいと思う。以下、2節では、(a) について、古典を中心に見ていく。3節では、(b) について、現代の文献を中心に見ていく。なお、文献資料は、これまでの調査で収集したもの（阿久津 2017 など。一部誤りを修正）のほかに、新たに収集したものをを用いる。以下、漢字の字体は、現代日本語の通用字体で示す（「音韻」と「音韻」は、「音韻」に統一する）。また、言語の音（発音）を表すのに、広く「音声」を用いる（ここでは、現代言語学的な意味で、「音声」と「音韻」とを区別することはしない）。

2. 「音韻」が《漢字音以外の言語音》を表す用法

個別の用法・用例を見る前に、まず、日本語と中国語とを合わせて、「音韻」の意味・用法（全般）について、概観しておく（表1）。表1の分類は、主に、『日本国語大辞典 第二版』（小学館 2000～2002）と『漢語大詞典』（上海辞書出版社 1986～1994）における「音韻」の意味区分に基づいている。{細かい意味・用法}は、筆者の調査に基づくものである（阿久津 2016, 阿久津 2017 など）。

表1 「音韻」の意味・用法の分類

『日本国語大辞典』	『漢語大詞典』	細かい意味・用法	本稿での分類
①音とひびき	①調和した音	音の響き, 楽器の音色, 歌声, 声の響き, ことばの響き	㊦音楽的な響き(詩のリズムや韻律を含む)
	②詩のリズムや韻律	詩のリズムや韻律	
③漢字音	③漢字音	漢字音(中国語音)の体系・要素(全体), 漢字音の構造, 漢字音の音声, 漢字音に関する学問(知識)	㊦漢字音(中国語音を含む)
②(漠然と)言語音	/	(漠然と)言語音全体, 言語音の体系, 言語音の構造, 音声, 単位音(音素・音節・モーラ等), 言語音に関する研究領域	㊦漢字音以外の言語音(言語学的な音を含む)
④言語学的な音			

表1には、『日本国語大辞典 第二版』と『漢語大詞典』の語釈を簡略化して挙げたが、以下に、原文を挙げておく（〔 〕内は筆者による訳文。以下同じ。用例は省略する）。

『日本国語大辞典 第二版』

- ① 音とひびき。また、その調和。音色（ねいろ）。
- ② （漠然と）言語音をいう。
- ③ 漢字の表わす一音節の頭初の子音とそれを除いた後の部分。音（声母・頭子音）と韻（韻母）。
- ④ 言語学で、具体的な音声から音韻論的な考察を経て抽象された言語音をいう。

『漢語大詞典』

- ① 抑揚頓挫的和諧声音。〔めりはりがあって調和した音。〕
亦指女子的風度儀態。〔また、女子の容姿・態度を指す。〕

- ② 指文学作品の音節韻律。[文学作品のリズムや韻律を指す。]
- ③ 漢字字音中声母、韻母、声調三要素的総称。[漢字字音中の声母・韻母・声調の三要素の総称。]

本稿では、日本語と中国語との対照を考え、『日本国語大辞典 第二版』の①～④と、『漢語大詞典』の①～③とを組み合わせて、3分類とした(表1の「本稿での分類」)。「漢語大詞典」の①と②とを1つ(⊖)にまとめたのは、日本語の詩歌には、平仄や押韻などの格律がなく、この両者に区別のつけにくい部分があるからであり、『日本国語大辞典 第二版』の②と④とを1つ(⊕)にまとめたのは、この両者は隔たりが大きく、両者を分けると、「言語学」以前の)伝統的な言語研究における「音韻」などが扱いにくくなる(どちらにも入れられなくなる)からである。また、⊖《漢字音》に中国語音を含めたのは、漢字音と中国語音とは、日本語では区別されるが、中国語にはその区別がないためである(以下、「漢字音」は、中国語音を含むものとする)。

以下、これに基づき、「音韻」の意味・用法について見ていく。

2.1 日本語の例

はじめに、日本語の「音韻」について見ていく。ここでは、まず、全文検索ができるデータベースを用いて抽出した「音韻」の用例を⊖～⊕に分類した結果を、まとめて示す(表2)。ここで用いたデータベースは、古典では、「ジャパンナレッジ」の『新編 日本古典文学全集』(全88巻)、同じく『群書類従』(正・続・続々の133冊。以下、『群書類従』)、同じく『東洋文庫』(2019年の第5回公開までの772冊)、現代語では、「ジャパンナレッジ」の『文藝春秋』(1923～1950)、「現代日本語書きことば均衡コーパス」(検索サイト「少納言」を利用。以下、英語の略称「BCCWJ」を用いる)である(これらの内容に重なりはない)。これらで「音韻」を検索し、現れた用例1つ1つについて、「音韻」の用例であるか、そうであっ

た場合、それがどのような意味・用法であるか、確認を行った。

表2 「音韻」の意味・用法（日本語）

	㊦音楽的な響き	㊧漢字音	㊨漢字音以外の言語音
『群書類従』 平安～江戸時代	16例（14文献）	19例（7文献） 書名：2例（1文献）	3例（3文献）
『東洋文庫』 江戸時代	1例（1文献）	10例（8文献） 書名：4例（1文献）	9例（3文献）
『文藝春秋』 1923～1950	6例（5記事）	12例（7記事） うち、複合語： 5例（2記事） 書名：2例（1記事）	18例（13記事） うち、複合語： 12例（8記事） 書名：1例（1記事）
BCCWJ（書籍） 1971～2005	17例（8文献） うち、複合語： 1例（1文献）	11例（6文献） うち、複合語： 5例（4文献） 書名：1例（1文献）	94例（43文献） うち、複合語： 67例（34文献） 書名：2例（1文献）

古典では、『群書類従』所収の古典（本文）に、{書名2例（1文献）を除き} 38例（22文献）が、『東洋文庫』所収の日本の古典（江戸時代以前のもの）の本文（原文）に、{書名4例（1文献）を除き} 20例（11文献）が見られた（『新編 日本古典文学全集』所収の古典（本文）には、用例がなかった）。

現代語では、『文藝春秋』に、{書名3例（2記事）を除き} 36例（25記事）が見られた。BCCWJでは、「書籍（1971～2005）」に、{書名3例（2文献）を除き} 122例（57文献）、「Yahoo! 知恵袋（2005）」に7例が見られた（「雑誌」、「新聞」、「白書」、「教科書」等には、用例がなかった）。表2には、「書籍」の用例数のみを挙げた。

表2では、書名（『国語音韻論』など）は別扱いにし、複合語（「音韻変化」、「音韻論」、「音韻学者」、「音韻法則」、「音韻体系」など（「音韻的」、「音韻上」、「音韻面」は、複合語に含めない））については、内数で示し

た。

表2からは、ごく大まかな傾向として、とくに現代語の「音韻」について、㊦《漢字音以外の言語音》が主要な意味・用法になっている(古くは、そうではなかった)、ただし、㊧《音楽的な響き》や㊨《漢字音》の意味・用法で使われることもある、ということがうかがえる(なお、現代の小型(学習)国語辞典には、㊦のみ、あるいは、㊧と㊦の意味・用法しか挙げられていない(阿久津 2016: 23))。

以下、㊦《漢字音以外の言語音》について、古典を中心に見ていく。

「音韻」が㊦《漢字音以外の言語音》を表す用例は、『群書類従』に3例(3文献)、『東洋文庫』に9例(3文献)見られた。

『群書類従』の3例は、以下のとおりである(一部訓点を補った。下線は筆者。以下同じ)。

- (01) 音韻少異。大意相似也。(『香字抄』平安後期)
- (02) 明通悉曇之音韻。(三善為康『拾遺往生伝 卷中』1111頃)
- (03) 殊朗悉曇之音韻也。(宗蓮『大法師浄藏伝』1231)

室町時代以降の用例はなかった。これらの「音韻」は、すべてインドの言語(梵語)の音声を意味すると思われる。

『東洋文庫』の例は、以下のとおりである(「検索」で現れなかった3例(05・06・13)を補い、12例を挙げる。また、本文(原文)は、「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」で確認した(表記・校訂は『東洋文庫』に従う))。

- (04) 音韻ノ通ジ難キ事アリ。(前野蘭化『蘭語随筆』1770頃)
- (05) 「ヲランド」ノ人ニモ音韻分明ナラザル者アリ。(同上)
- (06) 訳者ノ中ニモ音韻ノ異同アリテ、(同上)
- (07) 国字ニテ彼音韻訳文等ノ解ヲ(前野蘭化『蘭語訳筈』1785)
- (08) 字体音韻(同上)
- (09) 字体・音韻ヲ検シテ、(同上)

- (10) 訳字体音韻 (同上)
- (11) 字体・音韻ノ浅考ヲ載ス。(同上)
- (12) 音韻相紛レザル者ト, (同上)
- (13) 全キ「スラホニヤ」ノミノ文字音韻ヲ知ベキ事ヲ希フ者ナリ
(前野蘭化『東察加志』1789)
- (14) 「ヘブレエウス」ノ文字・音韻・言語ヲ (同上)
- (15) 余ノ六種モ只文字音韻ヲ考察シタルマデニテ, (同上)

これらは、すべて前野蘭化(良沢)の著作中のものである。このうち、(04)~(12)は、オランダ語の音声、(13)は、「スラホニヤ」(スロベニア)の音声、(14)は、「ヘブレエウス」(ヘブライ)の音声、(15)は、6言語{朝鮮・蒙古・韃靼・梵文・「マレイス」(マレー)・「ギリイキス」(ギリシャ)}の音声を意味すると思われる。このうちの7例で、「字体」(「文字」と「音韻」とを並立させている点が注目される{前野良沢は、外国の文字に大きな関心をもっていたようである(岩崎1996:135)}。

さらに、用例を補うため、『古事類苑』(「ジャパナレッジ」所収)、大西(1934)、馬淵(1993)、釘貫(2007)などの諸先行研究に引かれている用例のうち、「国立国会図書館デジタルコレクション」,「国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース」,「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」等により原文を確認できたもの、および、その他の江戸時代の語学書に現れた用例について、その意味・用法を確認した。その結果、主に江戸時代の学者の著作に、㊦《漢字音以外の言語音》を表す「音韻」の用例が見られた。

いくつか例を挙げる(本文は、上掲のデータベースによる)。

- (16) 南天は中天に次で。東天北天よりも音韻詳雅なり。(契沖『和字正濫鈔 卷一』1693成立, 1695刊)
- (17) 京都中国板東北国等の人に逢て其音韻おんるんを聞に(鴨東蕨父『仮名文字使 蜷縮涼鼓集 上』1695刊)

- (18) 東方音韻五十母字 (新井白石『東音譜』1719序)
- (19) 人言有_二自然之音韻_一焉 (文雄『磨光韻鏡上』1744刊)
- (20) 又御国ノ音韻ハ甚悉曇ニ似タルコト多シ (本居宣長『字音仮字用格』1776刊)
- (21) 二十六ノ文字ヲ二字或三四字以上ヲ連合シテ音韻^{カナ}ヲ諧ヘ (大槻玄沢『蘭学階梯 下巻』1783成立, 1788刊)
- (22) 殊に音韻言語は。太古より毎国^{クニゴト}にとなへ来たりし者なるを。(上田秋成『靈語通 第五』1795序)

(16) は、梵語の音声 {この記事は、安然『悉曇藏』(880) によると思われる}, (17) は、日本語の方言 (京都・中国・板東・北国等) の音声, (18)・(20) は、日本語の音声, (19) は、人類 (一般) の音声, (21) は、オランダ語の音声 (とくに音節), (22) は、各言語の音声を意味すると思われる。

これらの用例から、日本語では、江戸時代以前から、「音韻」を、日本語を含め、諸言語の音声に使っていたことが確認できる。

近代以降では、《言語学的な音》を表す用例が多くなるが、ここでは、特定 (個別) の言語の音声を表す「音韻」の用例をいくつか挙げるにとどめておく {『文藝春秋』, BCCWJ の用例のほか, 「国立国会図書館デジタルコレクション」, 『雑誌太陽』(「ジャパンナレッジ」所収) の「見出し」検索で求めた用例を挙げる}。

- (23) 文字及音韻 (Letters and sounds) (バシル・ホール・チャムブレ
ン『英文典』1893)
- (24) 朝鮮の諺文は精密に音韻を写すに適するが故に (井上哲次郎
「国字改良論 (承前)」『雑誌太陽』4-19 1898)
- (25) 我国の音韻は単純であり, [...] 世界にはこれよりも猶音韻の単
純な国語があり, (上田万年「二十世紀に於ける国語学の位地」
『雑誌太陽』12-9 1905)

- (26) 琉球語の単語は、日本語のにすげかへられ、その音韻・語法さては言ひあらはしまで、日本的になつたことは、(伊波普猷「琉球と大和口」『文藝春秋』8-3 1930)
- (27) 英語は、文法や音韻でもフランス語が上層言語になっているが、これは語彙で見られるほどはっきりと現われてはいない(ステューヴン・ロジャー・フィッシャー、鈴木晶訳『ことばの歴史』研究社 2001)

2.2 中国語の例

つづいて、中国語の「音韻」について見ていく。まず、全文検索ができるデータベースを用いて抽出した用例を㊶～㊸に分類した結果を、まとめて示す(表3)。ここで用いたデータベースは、古典では、「中国哲学書電子化計画」,「漢籍電子文献資料庫」,現代語では、「BCC 漢語語料庫」(BCC:北京語言大学コーパスセンター。以下、「BCC」)である。「中国哲学書電子化計画」は、「先秦兩漢」,「漢代之後」で検索した。「漢籍電子文献資料庫」の分析対象は、「正史」(『清史稿』は除く)と「小説」に限った。両者の内容に重なりはない。BCCは、「多領域」で検索した。「多領域」には、新聞、文学、ミニブログ(「微博」),科学技術文献(「科技文献」),古典などが含まれ、均衡コーパス(「平衡語料庫」)になっている(苟ほか 2016: 95)。このうち、古典の用例(他のデータベースと重なる 35 例, および、『水滸伝』1 例,『紅樓夢』1 例の計 37 例)は対象からはずした。また、同じ用例が重複して現れた(「全文」が同じ)場合は、1 と数えた。BCC の本文(「全文」)には、誤字や脱字があると思われるものが多く、分類しにくいものもあるため、数字は大まかなものである。また、BCC では、「微博」,「科技文献」,『人民日報』に標題がなく、文献(記事)の同定ができないため、表 3 に文献数は入っていない。これらで「音韻」を検索し、現れた用例 1 つ 1 つについて、「音韻」の用例

であるか、そうであった場合、それがどのような意味・用法であるか、確認を行った。

表3では、書名等(『中原音韻』などの書名のほか、曲名・講座名などを含む)は別扱いにし、「音韻学」等(「音韻学」のほか、「漢語音韻学」などの「～音韻学」, 「音韻之学」, 「音韻学家」を含む)については、内数で示した。

表3 「音韻」の意味・用法(中国語)

	㊦音楽的な響き	㊦漢字音	㊦他の言語音
「中国哲学書電子化計画」 南北朝～清代	65例(11文献) 内訳： ①調和した音： 54例(10文献) ②詩のリズムや韻律： 11例(3文献)	3例(2文献) 書名：3例(2文献)	
「漢籍電子文献資料庫」 南北朝～清代	47例(14文献) 内訳： ①調和した音： 36例(10文献) ②詩のリズムや韻律： 11例(7文献)	25例(5文献) うち、「音韻之学」： 1例(1文献) 書名等：10例(3文献)	
BCC(多領域) 近現代	489例 内訳： ①調和した音： 281例 ②詩のリズムや韻律： 218例 書名：1例	244例 うち、「音韻学」等： 111例 書名等：63例	5例 うち、「音韻学」等： 2例

表3からは、「音韻」について、㊦が主要な意味であるが、㊦も多く見られ、㊦はほとんど使われない、ということがうかがえる。また、全体的に用例数が多く、中国語では、日本語に比べて、「音韻」の使用頻度が高いことがうかがわれる(筆者による、2014～2015年発行の新聞の調査で

は、「音韻」の用例数（複合語や書名等を含む）は、日本の『朝日新聞』が14例であったのに対し、中国の『光明日報』は70例であった（阿久津2016で用いたデータによる）。

なお、（表3には挙げていないが）ほかに、BCCに、ウーロン茶の《鉄観音（の味や香り）》を表す用例が見られた（8例）。例を挙げておく。

- (28) 安溪鉄観音属半発酵的烏龍茶極品，有一種特殊的“音韻”，[安溪の鉄観音は半発酵のウーロン茶の最高級品に属し，一種の特別な「音韻」があり，]（李宇思「北国茶韻」『福建日報』2006/01/25）

以下、㊦《漢字音以外の言語音》について、古典を中心に見ていく。

「音韻」が㊦《漢字音以外の言語音》を表すと思われる用例は、「中国哲学書電子化計画」（「先秦兩漢」，「漢代之後」，「漢籍電子文献資料庫」（「正史」，「小説」）の文献には、見られなかった。しかし、中国以外の（伝説上の）国々における「音韻」研究（あるいは、音韻の知識）を表す例が、清代の長編小説である『鏡花縁』に見られた（このほかに、「漢籍電子文献資料庫」の「釈家」の『大正新脩大藏經』所収の玄奘著『大唐西域記 卷十二』（646）に、「印度」の言語の音声を表すと思われる「音韻」の例が見られた）。

『鏡花縁』は、1818年初刊（蘇州原刻本）の白話小説（章回小説）で、『広辞苑 第7版』（岩波書店2018）には、「清代の長編小説。李汝珍の作。一〇〇回。唐の則天武后のとき人間界に流された花神が不思議な国を遊覧したり、武后が女性の科挙を行なったりする話。社会風刺に富み、女権の主張が見られる。」とある。作者の李汝珍は、『李氏音鑑』（1805成立、1810刊）という著作をもつ音韻学者であり、『鏡花縁』の中にも、音韻に関する知識（蘊蓄）がしばしば登場する（張1955:3は、「文字、音韻の遊戯」という表現を用いている。加部2019:240は、「音韻遊戯」について、「教育と大いに関連していたものであったと思しい」と述べている）。

『鏡花縁』に現れた「音韻」の用例(22例)をすべて挙げておく〔本文は、張友鶴校注本による。〔〕内の日本語訳は、田森1961による(ただし、50は筆者による)。〔〕内は筆者による注釈。以下同じ。なお、『鏡花縁』には、(古くから「音韻」の同義語として使われている)「声韻」は使われていない〕。

- (29) 《毛詩》句子総是叶著音韻。〔毛詩の句は全部が音韻にかなっているといひます。〕(『鏡花縁』第17回)
- (30) ‘大老’二字、按音韻呼去、為何不是‘鳥’字?〔『大老』の二字は音韻からいってみてなぜ『鳥』にならないのですか?〕(『鏡花縁』第19回)
- (31) 老夫向聞歧舌国音韻最精、〔歧舌国では音韻学に通じていると聞いておりますから、〕(『鏡花縁』第19回)
- (32) 何以彼処曉得音韻?〔なぜそこ〔歧舌国〕では音韻学に通じているのですか?〕(『鏡花縁』第19回)
- (33) 上面載著諸子百家、人物花鳥、書画琴棋、医卜星相、音韻算法、〔その中〔『少子』〕には諸子百家、人物花鳥、書画琴棋、医卜星相、音韻算法など、〕(『鏡花縁』第23回)
- (34) 考試之例、各有不同：或以通經、或以明史、〔…〕或以楽律、或以音韻、〔試験の規則はそれぞれ違っております。経書、歴史、〔…〕音律学、音韻学、〕(『鏡花縁』第24回)
- (35) 小弟正因音韻学問、盼望歧舌、〔僕は音韻の学問のために歧舌を待ちわびているのですが、〕(『鏡花縁』第26回)
- (36) 何不前去探聽音韻来路呢?〔ひとつ音韻の来歴を探ってみようと思いませんか?〕(『鏡花縁』第28回)
- (37) 趁勢談起音韻、求他指教。〔ついでに音韻の話始めて教えてくれとたのんだのでございます。〕(『鏡花縁』第28回)
- (38) 音韻一道、乃本国不傳之秘。〔音韻の道はわが国〔歧舌国〕の門

外不出の秘密です。〕(『鏡花縁』第28回)

- (39) 如将音韻教会, [もし音韻を教えてくれるなら,] (『鏡花縁』第28回)
- (40) 不意習学音韻竟如此之難, [音韻の勉強がこんなにむずかしいとは思ひもかけませんでした,] (『鏡花縁』第28回)
- (41) 這個音韻, 拋老夫看来, 只好来生托生此地再学罷。[音韻というものは, 来世でこの国 [歧舌国] に生まれ変わって改めて勉強するしかないようでございますよ。] (『鏡花縁』第28回)
- (42) 那些少年聽見問他音韻, [その若い者が音韻のことを聞かれたとなりますと,] (『鏡花縁』第28回)
- (43) 其能与隣邦並駕齊驅者, 全仗音韻之学, [それでも隣国と太刀打ちできるのは全く音韻の学による] (『鏡花縁』第28回)
- (44) 他恐隣国再把音韻学去, 更難出人頭地, [隣国がこのうえ音韻学を学び取ってしまったら, いよいよ人のうえに頭が出せなくなるという心配から,] (『鏡花縁』第28回)
- (45) 如将音韻伝与隣邦, [もし音韻を隣邦に伝授せし者は,] (『鏡花縁』第28回)
- (46) 因想起音韻一事, 甚覺後悔, [音韻の件を思い出してはなはだ後悔し,] (『鏡花縁』第29回)
- (47) 並未学過音韻。[音韻学は学んだことがございません。] (『鏡花縁』第31回)
- (48) 枝小姐既不曉得音韻, [枝のお嬢さんに音韻がわからないとしますと,] (『鏡花縁』第31回)
- (49) 而且音韻一道, 亦莫非学問, [おまけに音韻の道は学問でございます。] (『鏡花縁』第31回)
- (50) 俺自從在歧舌国学会音韻, [俺は歧舌国で音韻を学んでから,] (『鏡花縁』第52回)

これらの「音韻」は、多くが学問としての「音韻」(あるいは、音韻の知識)、すなわち「音韻之学」(「韻学」)を表すと思われる。また、その「音韻」は、ほとんどが「海外」の国々における「音韻」である(30は「黒齒国」、34は「淑士国」、残りは、(29・33を除き)「歧舌国」における「音韻」である。29は、『毛詩』の「音韻」(韻律)、33は、『少子』(『老子』のもじりの架空の書物)所載の「音韻」。しかし、本文中で、実際に「音韻」として取り上げられているのは、いずれも漢字音である。

その「音韻」の内容については、胡(1980: 520)によれば、第31回に出てくる「歧舌国」の「字母」(33行×22字の表)が、『李氏音鑑』の33声母・22韻母と一致していて、『李氏音鑑』の「要点」というべきものになっている。そこには、「南方韻学家」の「影響」があるものの、『中原音韻』(1324)以来の(「实用」や「今音」を重んじる)「北方音韻学」の「遺風」が見られるという。また、李(1983: 395)は、『李氏音鑑』には、南北の方言音が包括されており、『切韻』(601)序文にある「論南北是非、古今通塞」[南北・古今の異同を論じる]の「観念」が見られると述べている。ここには、「音韻(之学)」のもつ、実用性への志向と普遍性への志向とが、ともに見られる(阿久津 2020b: 10)。

つまり、『鏡花縁』に登場する「海外」諸国の「音韻」は、中国の「音韻」そのものということになる(小説中では、「歧舌国」において、「音韻」は、国の安全保障上の重要な技術として、国家機密とされている)。そもそも、『鏡花縁』に出てくる「海外」諸国の言語は、中国語(「本朝」の言語)とほぼ同じであり(たとえば、「黒齒国」の言語は、「語言也還易懂。」「言葉もまあわかりやすいほうです。)(第16回)と描写されている}、[「海外各国語言惟歧舌難懂。」「海外の諸国の言葉のうち、歧舌だけが分かり難い」(第28回)とされる「歧舌国」の言語でさえ、「本朝」の者には、半月の学習で習得できるものである}〔住了半月、每日上来聽他說話、就便求他指点、学来学去。〕〔半月ほど逗留し、毎日彼らの話を聞きに上陸し

て、折を見て教えてくれとたのみ、あれこれと勉強しますうちにやっと覚えこみました。] (第28回) とある。中野 (1974: 21) は、これらの国々について、「どんな未知の国でも、人々は唐敖ら [「本朝」からの旅行者] と同じ言葉を話すから、意志の疎通にこと欠くことはなく、倫理観も同じであるために生命の危険はほとんどない。危険はあっても、予測可能である。つまりは、『鏡花縁』に登場する三十あまりの国々は、住民の顔かたちや習俗にいくらか変わったところがあるだけである。」と述べている。

いずれにしても、『鏡花縁』に出てくる「海外」諸国の「音韻」は、中国語の「音韻」と同じであり、『鏡花縁』に見られる「音韻」は、いずれも⊖《漢字音以外の言語音》を表す例には当たらないということになる (⊖《漢字音》に当たる)。

中国においては、近代以降も、言語音としての「音韻」は、ほぼ⊖《漢字音》に限られていたようである。1930年頃に、ヨーロッパから伝来した phonology に「音韻学」が当てられたが、1950年代頃からは、これに「音位学」{本来は、phonemics (音素論) の訳語。1980年頃からは「音系学」も} が使われるようになり、今日、「音韻学」は、ほぼ中国語を対象とする伝統的な研究 (「漢語音韻学」) だけ表すようになっている (台湾では、「音韻学」は、広く phonology に使われ、中国伝統の音韻学は、主に「声韻学」と呼ばれている) (阿久津 2018a: 50)。

ただし、BCC には、⊖《漢字音以外の言語音》を表すと思われる例が5例 (うち、「～音韻学」が2例) 見られる。例を挙げる (一部表記を改めた)。

- (51) 半農到徳法研究了音韻好幾年, [半農 (巖復) は, ドイツ・フランスに行き, 「音韻」を数年間研究した。] (魯迅『為半農題記《何典》後作』1926)
- (52) 他運用有関滿、蒙文音韻方面的知識, 比各種史料, 対原書進行校勘, 和注釈。[彼 (沈曾植) は, 滿語, モンゴル語の「音韻」]

に關係する方面の知識を運用して、各種の史料を比べ、原書(『蒙古源流』)に対する校勘・注釈を進めた。](「科技文献」)

- (53) 背誦也讓學生進入英語語境，體驗英語的音韻語法句型及表達邏輯。[背誦もまた、學生に、英語の文脈に入って、英語の「音韻」・文法・文型、および、論理を表現することを体験させる。](「科技文献」)

(51)~(53)の「音韻」は、それぞれ、ドイツ・フランスの「音韻(学)」、満語・モンゴル語の「音韻」、英語の「音韻」である。(53の「音韻」は、あるいは、英語のリズムや韻律ととることも可能かもしれない)。ほかに、「~音韻学」に、「《古蘭經》音韻学」「《コーラン》音韻学」,「阿文音韻学」[アラビア語音韻学]が見られた。

3. 「音韻」が《言語音(体系)全体》や《単位音》を表す用法

言語音(⊖《漢字音》, および, ⊖《漢字音以外の言語音》)を表す「音韻」には、細かく見ると、いくつかの意味・用法がある。これまでに挙げた例でいうと、『鏡花縁』の「音韻」は、多くが《漢字音に関する知識や学問》であるが、ほかの例を見ると、特定(個別)の言語における、《言語音(体系)全体》(02・08・20など), 《個別音(音声)》(04・17・18など), 《言語音(漢字音)の構造》(30)などを表す用法が見られる。本節では、このうちの《言語音(体系)全体》, 《個別音》(分節音, 単位音)を中心に見ていきたい(以下、音声学のか、音韻論的か、単音・音素レベルか、音節・モーラレベルか、などにかかわらず、分節音(個別音)を、広く《単位音》と呼ぶことにする)。

3.1 日本語の例

まず、日本語について、現代の文献を中心に見ていく。BCCWJには、

㊦ 《漢字音以外の言語音》を表す「音韻」に、次のような意味・用法が見られた（編者名は省略する）。

・《言語音全体》

- (54) 言語のドリフトによって、言語は音韻、形態、語彙の領域において変化するが、しかし言語の基本的な体系、すなわち構造型は変化に抵抗する。（平林幹郎『サピアの言語論』勁草書房 1993）
- (55) それまでの言語学の主流は言語の音声や音韻の史的变化を問題とするものであった。（丸山圭三郎『言葉とは何か』夏目書房 2001）
- (56) 音韻の調査は、その土地のことばの音声的な違いを聞き取るうとするため、必然的に録音機を多用することになる。（佐藤和之『ガイドブック方言研究』ひつじ書房 2003）

・《単位音》

- (57) この表意性は一面で歴史的仮名遣いにおいては一層強かったが、仮名という文字は、平安時代以後に変化したり新しく発生したりした音韻に対応する記号をいちいち創作することはせず、既存の字母を工夫することで済まそうとしてきた傾向が強い。（阪倉篤義『漢字百科大事典』明治書院 1996）
- (58) 玄奘三蔵法師は真諦三蔵や鳩摩羅什三蔵による梵語の pudgala の漢訳が音韻を訳しただけの「補特伽羅」であるが、この一事が唯識教学にとって重大事であることを痛感されました。（松久保秀胤『安らぎを求めて』善本社 2001）

BCCWJ の㊦ 《漢字音以外の言語音》を表す「音韻」（書名・複合語は除く）では、《言語音全体》の用例が多数を占めるが {20 例 (10 文献)}, 《単位音》を表す例も見られた {6 例 (5 文献)} {ほかに、《言語音の構造》を表すと思われる例 (1 例) も見られた}。なお、㊦ 《漢字音》について

は、ほぼ《言語音全体》の用例しか現れなかった。

日本語学(音韻論)では、「音韻」を《単位音》(具体的には、モーラ、あるいは、音素)としてとらえることが多い(阿久津 2019: 234-236)。『朝日新聞』の記事から、「音韻」が《単位音》を表す用例を補っておく[「朝日新聞記事データベース」(聞蔵Ⅱビジュアル)を利用した]。

- (59) それより前の神代では、もっと音韻の数が多かったのが常識なのに、仮名時代とおなじ数というのはふしぎである。(2003/11/10)
- (60) さらに分析すると、「た・と・ぼ・ん」の4音で組み立てていることがわかります。少ない音韻を様々に合成させて、快いリズムを生み出しているのです。(2012/08/02)
- (61) 例えば「ベートーベン」を「ベートーヴェン」と表記しても、通常は「ヴェ」の発音を1拍目の「ベ」とことさらに区別しないはずです。これは、日本語の「音韻」にvがなく、bで置き換えられるためです。実は音韻は、それぞれの言語によって種類が異なるものです。逆の例から見てみましょう。「新聞」は、ヘボン式ローマ字で「shimbun」とつづります。2拍目の「ん」を「m」、4拍目の「ん」を「n」と表記するのは、英語などでは両者を別々の音韻と捉えるため。しかし日本語話者は「ん」という一つの音韻と考えるので、日本語では「しんぶん」と書きます。(2019/05/11)
- (62) たばこたまごには、誤って伝わりやすい音韻があるという。「ば」と「ま」には上下の唇で発する両唇音という子音が含まれ、同様に子音でみると声帯を振動させない無声音の「こ」は振動させる有声音の「ご」に変化しやすいそうだ。(2020/04/25)
- (59)・(60)の「音韻」は、音節(あるいは、モーラ)を表し、(61)・(62)の「音韻」は、音素を表していると思われる。日本語の「音韻」に

は、このように、《単位音》を表す用法が見られる。「音韻」が《単位音》を表す用法は、日本語では、古くから見られるが（阿久津 2019: 237-238）、明治初期までは、「音（頭子音）＋韻（母音）」という意味合いが残っていたようである（阿久津 2020a: 10-11）。

3.2 中国語の例

つづいて、中国語について、現代の文献を中心に見ていく。BCC では、⊖《漢字音》を表す「音韻」（書名は除く）を細かく見ると、《漢字音に関する学問（知識）》を表す用例が多数を占めるが（「音韻学」等を除き、83 例）、《漢字音の体系》を表す例も多く見られ（37 例）、《漢字音の音声》を表す例も見られた（11 例）{ほかに、《言語音の構造》を表すと思われる例（2 例）も見られた}。例を挙げてみる（65・66 は、「音韻学」の例）。

・《漢字音に関する学問（知識）》

- (63) 吉備真備在唐 18 個年頭，鑽研儒家經典，學習律令、禮儀、音韻、天文和曆法。[吉備真備は、唐に足かけ 18 年いて、儒家の經典を研究し、律令・禮儀・「音韻」・天文・曆法を学んだ。]（『人民日報』1998）
- (64) 外国考官用英語問吳飛：“你能告訴我什麼是音韻嗎？”他歪着腦袋想了半天，急中生智。“[英文略]它告訴你一個字在古代的發音。”[外國人的試驗官は、英語で吳飛に尋ねた。]（『音韻』とは何か教えてください。」彼は、頭を傾けて長いこと考えて、よい考えが浮かんだ。「単語の古代の発音を教えてください。」）（張曉鳴「“大学生郭靖”將読研」『文滙報』2004/06/24）
- (65) 漢語專業非常枯燥，我是說除非你真對音韻學、漢語史什麼的感興趣，否則你根本搞不好這門學問。[中国語専攻はとてもつまらなく、「音韻学」や中国語史などに本当に興味がなければ、この学問はまったくうまくやれない。]（范偉『我的倒兒爺生涯』

1999)

- (66) 它包括医学、音韻学、音位学、文学、社会学、文化学、美学、楽学、曲学等多種学科。[それ(「声楽芸術」)は、医学・「音韻学」・音位学・文学・社会学・文化学・美学・音楽学・曲学等の多くの学科を含む。] (「科技文献」)

・《漢字音の体系》

- (67) 漢語言曾在字体、音韻上經歷多次的變化和發展，[中国語は、かつて字体・「音韻」の上に多くの変化と發展を経験してきた、] (「科技文献」)
- (68) 入声字雖已在京劇音韻中派入平上去三声，[入声字は、すでに京劇の「音韻」の中では平声・上声・去声の3声に分かれて入っているが、] (翁思再「程硯秋的唱論及其他」『文滙報』2004/01/28)
- (69) 閩中有許多吳語音韻，吳閩方言有着密切的關係。[閩語の中には、多くの吳語の「音韻」があり、吳方言と閩方言には密接な関係がある。] (「科技文献」)

・《漢字音の音声》

- (70) 他們的對話裡，回響着四川方言的音韻。[彼らの對話の中で、四川方言の「音韻」が響き渡っている。] (白先勇『台北人』1968)
- (71) 《礼記》有“鶉”的記載，和鶉同義，音韻也很近。[『礼記』に「鶉」の記載があり、「鶉」と同義で、「音韻」も近い。] (「科技文献」)
- (72) 他主張首先要大量聘請著名學者，分發到各學校，弁以四聲，糾正音韻，革除錯誤發音，[彼は、まず大量に著名な學者を招聘して、各學校に配屬し、四聲を弁別し、「音韻」を正し、誤った發音を改めるように主張した。] (張章鈺「足迹半天下文章發其勝：王沅和他的《漫遊紀略》」『福建日報』1982/06/13)

(63) は、諸学問の1つとして、「音韻」が挙げられている例である。このように、学問分野を列挙する例は、非常に多く見られた。(66) もその1つであるが、ここでは、「音韻学」と並んで、「音位学」(日本語の「音韻論」、または「音素論」に相当)が挙げられており、「音韻学」と「音位学」とが別扱いされている点が注目される。(64)・(65) は、「音韻(学)」という学問が、つまらなくて、役に立ちそうにないということを述べているものである。(67)~(69) の「音韻」は、それぞれ、中国語、京劇(に残る古い方言)、閩方言・呉方言の音韻体系(あるいは、その特徴)を表している。(70) の「音韻」は、四川方言の(全体的な)発音について述べている。(71) の「音韻」は、個別の漢字の読音について述べている{あるいは、これを、《単位音》(音節)を表す例とすることもできるかもしれない}。(72) の「音韻」は、矯正対象としての、福建なまりの発音を指している。

このように、中国語の「音韻」には、《漢字音に関する学問》、あるいは、《漢字音の体系》を表す用例が多く見られるが、《単位音》を表すと思われるものは、ほとんど見られなかった{日本語の例(59~62)では、《単位音》を表す「音韻」が、数詞、「多い」、「少ない」、「ある」、「ない」などと共起していることから、BCCで、いくつかの「検索式」を用いて(「q音韻」、「音韻*多」、「少*音韻」、「有*音韻」、「音韻*没」などで)、検索してみたが、ここからは、《単位音》を表す用例は見つからなかった}。

5. おわりに

以上、《言語音》を表す「音韻」について見てきて、日本語と中国語とで、その用法に違いが見られることが確認できた。その違いは、次のとおりである。

- (a) 中国語の「音韻」が、主に漢字音(中国語音)に限られるのに対して、日本語の「音韻」は、広く諸言語の音に使われる。
- (b) 中国語の「音韻」が、学問や体系を表すことが多いのに対して、日本語の「音韻」は、言語音全体を表すほかに、単位音として使われることが比較的多い。

参考文献

- 阿久津智(2016)「現代日本語における「音韻」の意味」『立教大学日本語研究』23 立教大学日本語研究会 pp.22-39
- 阿久津智(2017)「「音韻」の語誌」『拓殖大学 語学研究』136 拓殖大学言語文化研究所 pp.177-201
- 阿久津智(2018a)「「音韻論」と「音声学」の語誌」『立教大学日本語研究』25 立教大学日本語研究会 pp.35-53
- 阿久津智(2018b)「「音韻学」の語誌：音韻の研究を表す語について」『立教大学大学院日本文学論叢』18 立教大学大学院文学研究科日本文学専攻 pp.157-173
- 阿久津智(2019)「「音」と「音韻」」『立教大学日本文学』121 立教大学日本文学会 pp.233-247
- 阿久津智(2020a)「明治前期の「音韻」」『拓殖大学 日本語教育研究』5 拓殖大学日本語教育研究所 pp.1-29
- 阿久津智(2020b)「音韻の実用性と普遍性」『立教大学日本語研究』26 立教大学日本語研究会 pp.2-15
- 岩崎克己(1996)『前野蘭化2：解体新書の研究』(東洋文庫)平凡社
- 大西雅雄(1934)『音声学史』(国語科学講座-II-音声学)明治書院
- 沖森卓也・佐藤信・平沢竜介・矢嶋泉(2008)『歌経標式：影印と注釈』おうふう
- 加部勇一郎(2019)『清代小説『鏡花縁』を読む：一九世紀の音韻学者が紡いだ諧謔と遊戯の物語』北海道大学出版会
- 釘貫亨(2007)『近世仮名遣い論の研究：五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会
- 胡適(1980)「鏡花縁考証」『中国章回小説考証』上海書店(初出1923) pp.513-571
- 荀恩東・饒高琦・肖晧悦・臧嬌嬌(2016)「大数拋背景下 BCC 語料庫的研制」

- 『語料庫言語学』3-1 外語教学与研究出版社 pp.93-118
田森襄訳 (1961) 『鏡花縁』奥野信太郎・常石茂・村松暎・田森襄訳『児女英雄
伝 下 鏡花縁』(中国古典文学全集 30) 平凡社 pp.328-546
張友鶴 (1955) 「鏡花縁 前言」李汝珍, 張友鶴校注『鏡花縁 上』人民文学出版
社 pp.1-10
中野美代子 (1974) 『中国人の思考様式: 小説の世界から』講談社
馬淵和夫 (1993) 『五十音図の話』大修館書店
李汝珍, 張友鶴校注 (1955) 『鏡花縁 上・下』人民文学出版社
李新魁 (1983) 『漢語等韻学』(韻学叢書) 中華書局

- 【使用データベース類】(いずれも最終閲覧は, 2020年6月)
「朝日新聞記事データベース」(聞蔵Ⅱビジュアル) 朝日新聞社
<https://database.asahi.com/index.shtml>
「現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言」国立国語研究所
<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>
「漢籍電子文献資料庫」中央研究院 歴史語言研究所
<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw>
「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館
<http://dl.ndl.go.jp>
「古典籍総合データベース」早稲田大学図書館
<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>
「ジャパンナレッジ」ジャパンナレッジ
<http://japanknowledge.com>
「新日本古典籍総合データベース」国文学研究資料館
<https://kotenseki.nijl.ac.jp>
「中国哲学書電子化計画」中国哲学書電子化計画
ctext.org/zh
「BCC 語料庫」北京語言大学
bcc.blcu.edu.cn